

# 「総合的な学習の時間」の研究－厨川小学校の分析を通して－

佐藤 幸也\*・佐藤 聡久\*\*

(2003年3月20日受理)

Kohya SATOH and Akihisa SATOH

A Study of "SOGOTEKI NA GAKUSYU NO JIKAN-Period for Integrated Study-"  
- Through Analysis of Kuriyagawa Elementary School -

## 1 総合的な学習の時間創設の経緯

平成7年4月に始まった第15期中央教育審議会において、「21世紀を展望した我が国の教育のあり方について」という答申が出された。この中で注目されるのは、児童・生徒のゆとり教育推進と「生きる力」を育む教育である。

ここでいう「生きる力」とは、「たくましく生きるための健康や体力が不可欠」<sup>1)</sup>と、体力の向上を先ず唱い、その上で「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など」<sup>2)</sup>を指す。そこから自分のあり方・生き方を積極的に模索しつづけながら「主体性と協調性、心身の健康に支えられたバランスのとれた人間」<sup>3)</sup>として成長し、社会を支えていくことが期待されている。

この答申では、様々な学校教育のあり方における改善点が示されたが、要約すれば、

- ①教育内容の厳選と基礎・基本の徹底。
- ②一人一人の個性を生かすための教育の改善。
- ③豊かな人間性とたくましい体をはぐくむための教育の改善。
- ④横断的・総合的な学習の推進。
- ⑤教科の再編・統合を含めた将来の教科などの構成のあり方。

の5点が挙げられよう。

そこで、この方針を実現するため、平成10年7月29日の教育課程審議会において、以下の4点が教育課程改善のねらいとして挙げられた。

- ①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること。
- ②自ら学び、自ら考える力を育成すること。
- ③ゆとりある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること。

---

\*岩手大学教育学部

\*\*岩手大学大学院教育学研究科・盛岡市立厨川小学校教諭

④各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること。

ここで、特に③④にかかわって注目されるのが、これらのねらいを実現するために新設された総合的な学習の時間（以下、「総合」と記す。）である。自ら学び自ら考える力や「生きる力」の育成を目指す今回の教育課程のいわば目玉として設置された「総合」は、学校教育法施行規則第24条「小学校の教育課程は、国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭及び体育の各教科、道徳、特別活動並びに総合的な学習の時間によって編成する」に位置づけられており、小学校学習指導要領の第1章総則の中にその趣旨やねらい、学習活動及び実施にあたっての配慮事項が定められた<sup>4)</sup>。

具体的には、「総合」は、「各学校は、地域や学校、児童の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うもの」（小学校学習指導要領第1章総則第3の1）で、「次のようなねらいをもって指導を行う」（同第3の2）とされ、「(1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」「(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること」の2点が強調されている。

ちなみに「総合」の名称は「各学校における総合的な学習の時間の名称については、各学校において適切に定める」（小学校学習指導要領第1章総則第3の4）とされている。

しかし、こうした中央教育審議会答申、教育課程審議会答申、及び学習指導要領の改訂を受け実施されることになった「総合」は、理論的にも実践的にも多くの議論が錯綜している。岩手県でもここ数年岩手県立総合教育センターをはじめ、各種研究会において実践が報告されてきたが、新設された「総合」について問題として浮上してきたのが次の3点である。一つは「総合」のための教材開発であり、二つには指導の工夫、三つ目に評価の問題である。

そこで、本稿では、県内の先行的事例を参照しながら「総合」に取り組んだ盛岡市立厨川小学校<sup>5)</sup>の実践を例に、これらの問題について考察する。

## 2 岩手県下の小学校における総合的な学習の時間

岩手県では、開発研究学校<sup>6)</sup>が文部大臣の、調査研究協力校が岩手県教育委員会の研究指定を受け、「総合」についての研究がなされてきた。例えば岩手大学教育学部附属小学校<sup>7)</sup>（以下、「附属」と記す。）は「わかたけタイム」を設定し、実践に取り組み<sup>8)</sup>、他にも調査研究協力校として11の小学校が実践を展開してきた。

これらの研究を参考にしながら岩手県教育委員会では、研究校以外の各学校向けに平成11年10月『「総合的な学習の時間」Q&A』<sup>9)</sup>を発行し、前出の研究校での実践を紹介しつつ「2002年までのスケジュール」を出して各校に取り組みを促すとともに、平成12年12月には『「総合的な学習の時間」実践事例集〈小学校〉』<sup>10)</sup>を発行した。また、平成10年の学習指導要領の改定以来、教育課程研究会（いわゆる伝講会）において「総合」のための資料が配られ、その趣旨の説明及び実践の方向について指導がなされた。

表1 「総合」に関する岩手県内の先行研究校

学 校 名	単 元 名	学 年
1. 滝沢村立柳沢小学校	「われらイワナ大博士」	5年生
2. 花巻市立花巻小学校	「ほくらの花巻物語」	6年生
3. 北上市立黒沢尻北小学校	「『20世紀の自分』～自分史を作ろう～」	6年生
4. 水沢市立常盤小学校	「『発見！ほくらの川！』～乙女川に鯉，来い，恋～」	4年生
5. 一関市立赤荻小学校	「『赤荻じまん』～生きものいっぱい！～」	3年生
6. 室根村立津谷川小学校	「みつめよう 津谷川を」	4年生
7. 陸前高田市立小友小学校	「小友町を探検しよう」	3年生
8. 遠野市立附馬牛小学校	「きれいな川を守るための一歩」	6年生
9. 山田町立山田北小学校	「山田を見つめて自分を見つめて」	6年生
10. 久慈市立小久慈小学校	「米米発表会をひらこう」	5年生
11. 九戸村立江刺家小学校	「江刺家神楽とわたしたち」	3年生

(岩手県教育委員会「『総合的な学習の時間』Q&A」平成11年10月 をもとに佐藤聡久が作成)

一方、盛岡市内においても「附属」の他に、いくつかの学校が先行研究を行った。特に、平成10年度から盛岡市の研究指定を受けた上田小学校は注目を集めた。新指導要領実施以前の平成11年度から13年度までの盛岡市内の主な学校の名前と研究主題は以下の通りである。

表2 「総合」に関する盛岡市内の取り組み

学 校 名	研 究 主 題
1. 山王小学校	「自らを深く耕す子ども 地域の自然・文化・人とのふれあいを通して」
2. 上田小学校	「感性をみがき，自分の課題を主体的に解決しようとする子どもの育成 －地域素材を生かした生活科・総合的な学習をとおして－」
3. 高松小学校	「自ら学ぶ子どもを育てる学習指導－生活科，総合的な学習の時間における 子ども一人一人の多様な活動を大切に授業づくりをめざして－」
4. 緑が丘小学校	「『かわりを大切に，自ら学び続ける子ども』をめざす総合的な学習の 時間（ふれあい学習）の指導のあり方」

(各校の研究紀要などをもとに佐藤聡久が作成)

これらの学校の研究の進め方には、以下のような共通点が見られる。

(1) 研究の進め方

「総合」研究の初期段階には年間計画試案の作成と研究体制の確立を図った。これは岩手県教育委員会が作成し、各学校に配布した前出のガイドブックでの研究の進め方に沿ったものである。

(2) 内容構成と教材開発の特徴

キーワードは「地域」である。「地域素材の教材化」，「地域の自然・文化・人とのふれあい」，「地域を知る・見直す」，「地域から広げる・発信する」，「地域と自分の関わり」といったような言葉が多く見られた。例えば上田小学校の場合，「地域」とは商店街，施設，町並み，自然，行事など全てが含ま

れ、そこには暮らす人びとの知恵や文化があり、児童が関わりを持つ中で生活を豊かにしたり学びを広げられるものであるとらえた。これらは、社会科の指導方法や教材開発の手法を踏襲したものである。

### (3) 評価

どの学校も研究の初期段階では評価について詳しく研究している学校はなかった。しかし、実践が2年目、3年目と進むにつれ、課題として評価のあり方が浮上し、新指導要領の本実施を期に評価の方法や項目について研究を進めた。評価の方法としては、児童の変容を長期にわたり多面的にとらえることができるポートフォリオ評価を導入した。例えば山王小学校の場合、児童個々に「総合ファイル」を常備し、活動の記録を自分で積み上げさせ学習のあしあとを残させた。これにより児童にとっては自己の良さや可能性、他者<sup>11)</sup>からの評価を児童に知らせることができるとした。一方、教師にとっては児童の変容や課題が把握でき、次の支援への手だてとなる評価方法であるとした。

そのような中、厨川小学校は平成11年度からの3年間、盛岡市教育委員会の研究指定を受けて「総合」の研究を始めることになった。以下、厨川小学校における研究について述べる。

## 3 盛岡市立厨川小学校における研究の経過（平成12年度以前）

### (1) 平成11年度以前の研究の経緯

厨川小学校は、平成元年版の学習指導要領の実施にあたって新設された生活科の先行研究指定を受け、昭和63年、平成元年、平成2年と3年続けて学校公開を行った。その後は国語と算数を中心に研究を進め、生活科中心に研究が進められることはなかったが、平成9年に「第4回東北小学校生活科教育研究協議会・第5回岩手県生活科教育研究大会」会場校となり、再度生活科の研究が進められることになった。そして平成9年10月24日(金)に、厨川小学校を会場にして「一人一人の子どもよさが生きる生活科の授業をめざして」という研究主題のもと盛岡大会の公開研究会が開催された。これが「総合」の研究のスタートになった。

### (2) 平成11年度の研究主題の設定

その後、平成11年度から13年度までの3年間、「総合」の研究を進めてきた。教師は自発的に先進校を視察したり、学校公開に参加<sup>12)</sup>したり、梶田叡一監修『総合的な学習の時間創造のための基礎・基本』（総合初等教育研究所）などを読んで「総合」の理解に努めたりした<sup>13)</sup>。

そして、平成11年度の研究主題を「子供の思いや願いがかなう総合的な学習の指導のあり方」とした。ここでは、指導課程の設定と各学年1単元の授業研究を柱として研究に取り組むことになった。その際、「総合」だけでなく、生活科も研究を継続することになった。その理由は、第一に前回の学習指導要領実施にあたり、生活科の研究指定校の実績があったこと。第二に、生活科は自分の思いや願いを生かし、主体的に活動すること、知識と生活の結びつきや「知の総合化」を図るという点で「総合」のねらいと共通していること。第三に、生活科が「総合」の土台となるといった考えからである。

### (3) 平成11年度の「総合」の単元開発

「総合」の単元開発にあたっては、教師は地域素材や各教科等の関連、児童の興味関心といったさまざまな面を考慮した。そこでは、まず地域素材の教材化の必要性が挙げられた。教師自身が学区あるいは学区の周辺に何があり、児童の学習にとって何が生かせるのか、何を学ばせたいのかということを確認するために学区について調べ、教材化につなげた。

次に、地域の人材発掘を行う目的で保護者にアンケートをとり、学区の人材マップを作成した。アンケートの結果、保護者からたくさんの回答が寄せられ、それをもとに厨川小学校の人材マップを作

成することができた。人材マップによって学習を広く展開できるようになり、後にいくつかの単元が開発された。人材マップを十分に活用した学年の実践<sup>14)</sup>もあった。

ところで、児童の興味・関心に基づいて学習を展開する性格を持つ「総合」であるが、地域の特色や歴史をぜひ児童に学習させたい、厨川小学校の児童ならばこのことについては知っておいた方がよいということを教えたい、といった教師の願いを学習の内容に取り入れるべきではないか、などの意見も挙げられ、その点もふまえて単元を構成することになった。

以上の教材開発、人材マップ作成、単元構成をふまえた授業研究をもとにして、授業の中で活動や体験活動を積極的に取り入れることを基本にした実践から、「みつける－みとおす－もとめる－ひろげる－ふりかえる」の5段階の指導過程を単元の中に位置づけることで「課題追求」型<sup>15)</sup>の「総合」が展開できることを確かめた。

その結果、各学年で表3のような単元を構成し、授業研究を経て厨川小学校の「総合」の方向性を確認した。

表3 平成11年度に開発した単元

学 年	単 元 名	時 数	関 連
3 年生	きれいな街にしたいなあ	18時間	環境・福祉
4 年生	北上川の自然	21時間	地域の特色・環境
5 年生	きのこもりもり森の中	19時間	自然体験・環境
6 年生	歴史探検「厨川の柵」	22時間	地域の特色・国際理解教育

(盛岡市立厨川小学校『研究紀要』平成13年10月2頁 をもとに佐藤聡久が作成)

#### (4) 平成11年度実践の問題点と課題

実践にあたっては児童の興味・関心、普段の生活や学習の状況などについてアンケート調査を事前に行った。その結果、自身の身の回りのものや環境、友達や人間に対しての興味・関心等はあるものの、それが多岐にわっており、個人差が大きいことが明らかになった。平成11年度の実践はこうした児童の実態をふまえて教材開発や単元構成をしたにもかかわらず、その成果は十分とは言えず、以下の2点が次年度の研究を進める上での課題となった。

- ①「総合」のひとつの単元は20～30時間程度で構成し、各学年間の系統性・発展性も考慮しながら開発していくことが大切である。
- ②「総合」の内容は、次の世代を担う児童たちが社会に出る前に、このことを体験させておきたい、この問題を考えさせたいという教師の願い、地域や社会の願いに基づいて考えていくべきである。

## 4 平成12年度の研究の経緯

平成12年度は、平成11年度の課題を受けて研究主題を「身の回りの環境(人・もの・自然)に進んでかわりながらよりよいものを求め続けていく子供の育成～生活科・総合的な学習の時間における課題追求の過程を重視した指導を通して～」とした。また、生活科・「総合」における各学年の目指す児童像<sup>16)</sup>の設定、生活科・「総合」の年間指導計画の作成、「総合」の時間割への位置づけの工夫、「課題設定場面」「課題追求場面」「ふりかえりの場面」を意識した授業実践を行った。

ここでは生活科・「総合」において、児童が問題を解決する過程を通して児童に形成していきたい力を「かかわる力」「追求する力」「表現する力」「求める力（平成13年度からは「見つめる力」に変更）」の4つに押さえ、低・中・高学年と養護学年<sup>17)</sup>それぞれで目指す児童像を設定した。

「求める力」を「見つめる力」に変更した理由は、児童の学習は次の課題をさらに見つけ常に追いつける「オープンエンド」<sup>18)</sup>にするのが望ましいと考えていたものの、実践を重ねていくうちに、クローズエンドの方が多くなってしまい、現実的ではないという考えが出されたことと、そもそも児童が対象をじっくりとらえる力すなわち「見つめる力」がきわめて弱いという実態が明らかになったからである。また、それ以外に自己の生き方も考える「総合」では、自分の成長を見つめ、他者の良さも発見するといった「見つめる力」という表現が適切なのではないかという考えも出されたことから、「見つめる力」に変更したのである。

平成12年度は4つの力に基づいた実践をするにあたって、改めて4～6年生児童を対象に実態調査（アンケート）を行った。そこから得られた結果を分析すると、

- ①自ら課題を見付けることが苦手であること。
- ②計画を立てて課題解決に取り組むことが苦手であること。
- ③調べたことをわかりやすくまとめる方法をよく知らないこと。
- ④相手にわかりやすく伝えるために発表方法を工夫することが苦手であること。

以上の4点が明らかになった。

そこで、平成12年度はこれらの点に重点を置くこととした。例えば、4年生で行った「教えて！いとも!!」（平成12年9月から10月まで2ヶ月間実践。）では、地域のどんなことを知りたいか児童同士で話し合いをしながら人材マップを活用し、誰に会ってどんな話を聞くか、またその内容を仲間に知らせるために話の内容をまとめ、わかりやすく伝えるための工夫、すなわちそのようなスキルを獲得するための実践を行った。5年生では「森のめぐみ」、6年生では「歴史探検『厨川の柵』」でも上記の点に留意しながら児童の学びを組織した。その結果、平成13年2月に再度実態調査を実施したところ、①から④のそれぞれの点において児童の変容が認められ、指導の有効性を確認することができた。

さらに、それぞれの学年で年間を通した「総合」の単元を開発し、3・4年生85時間、5年生95時間、6年生110時間の年間指導計画を作成したが、3学期における学習では天候の関係や年度末の多忙さの中で予定通りに実施することができないという問題点が出てきた。これを解決するため、「総合」の時間には「学年テーマ総合」だけでなく、短時間で構成され、学級の児童の興味や関心、担任の思いや願いを生かして指導できる「学級フリー総合」の時間を設けることにし、あわせて時間割も編成し直した。

表4 6年生の時間割例（平成12年度）

	月	火	水	木	金	土
1	社	学	算	図*	国	社
2	算*	国	国	図*	音*	国
3	家*	算	社	理*	算	算
4	家*	理	音	国*	道	
5	体	体	書		体	
6	委	ク*	み		理	

・年間を通した時間割とし、児童や父母には「\*」マークがついた時間が「総合」に変更になることがあると説明する。

・「総合」は可能な限り2～3時間続きとし、全日あるいは半日活动できる曜日を設定する。

※学=学活、ク=クラブ、委=委員会、書=書写、み=みんなの時間（ゆとり）

（盛岡市立厨川小学校『研究紀要』平成13年10月5頁 より）

なお、各学年で設定した目指す児童像を教師側が意識して実践指導に生かすことがなかなかできなかったことと、学習を成立させるためには基本的な生活習慣の確立や自他の認識も必要という理由から平成13年度は生活科・「総合」でつきたい四つの力に基づいて、学習指導と生徒指導の両面から重点目標を設定し、学年経営に位置づけることにした。

## 5 「確かな学び」をつくる研究の構想

### (1) 平成13年度の研究の経緯

平成13年度は「総合」による時間割変更や曜日変更の際の時数把握・授業時数確保のために、学年で週時数を確認しながら進めることにした。

学習環境についてもいくつかの改善を行った。まず、それまで一つだった図書室を、絵本や読み物を中心とした部屋と、調べ学習で用いる機会が多い理科や社会科に関連した図書を中心とした部屋に分けた。その結果、児童が探したい資料や本が以前より探しやすくなった図書室をつくることができた。また、それまで図工作品を中心に飾っていた掲示板は「総合」で活用する機会を増やした。

その上で、「確かな学びをつくる生活科・総合的な学習の時間の展開～人・もの・自然とのかかわりを通して～」という研究主題を設定し、平成13年10月17日に学校公開を行った。

### (2) 「確かな学び」とは

これは、過去2年間の「総合」への取り組みと、厨川小学校が目指す「学び方の習得」「基礎・基本の徹底」「豊かな人間性」「たくましく生きるための健康・体力」の育成という学校目標と児童の実態をふまえた上で、「生活科および総合的な学習の時間において、人・もの・自然との積極的なかかわりの中で（かかわる力）子供たちに確かな学びの力をつけていく」という研究仮説に基づいて設定されたもので、

#### ①かかわる力－自ら課題を見つける力－

・身の回りの環境（人・もの・自然）と積極的にかかわり、不思議や疑問を持ったり新たな発見をしたりすることができる力。

#### ②追求する力－課題を解決しようとする意欲、情報収集、選択、まとめる力－

・自分の課題を解決するために見通しを持ち、学習計画を立てることができる力（目的意識・こだわり）。

・課題解決へ向けて調査、取材、実験、観察などに主体的・創造的に取り組もうとする力。

#### ③表現する力－報告や発表、討論の力－

・調べたこと（情報）を整理・統合し相手にわかりやすく伝えるために工夫して表現しようとする力（目的意識・相手意識）。

#### ④見つめる力－自分の学習の過程や結果をふりかえる力－

・学習を振り返り、自分ができるようになったこと、進歩したこと、自分や友達のよさに気づく力。  
・自分を見つめ、これからの学習や生活を考えていこうとする力。

以上の四つの力によってつくられるととらえている。

そして、これらの力を生活科と「総合」を通してつけさせたいと考え、そのために四つの力をキーワードとして研究を進めた。以下の表に、各学年ごとにねらう「確かな学び」の姿と評価の観点を示す。

表5 各学年の確かな学びの姿

	かかわる力	追求する力	表現する力	見つめる力
一年生	自分と身近な人々や社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、楽しく活動しようとする。	自分の思いや願いを生かし、主体的に活動しようとする。	自分の感じたこと気づいたこと、楽しかったことを意欲的に表現しようとする。	自分のよさや友達のよさに気づき、学習や生活に生かそうとする。
二年生	自分と身近な人々や社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、いろいろな発見をする。	自分の思いや願いを生かし、主体的に活動しようとする。	自分の感じたこと気づいたこと、考えたことを意欲的に表現しようとする。	自分のよさや友達のよさに気づき、学習や生活に生かそうとする。
三年生	身の回りの環境（人・もの・自然）に対して、興味や関心を持ち、育ててみよう、調べてみようとする。	自分の課題を持ち、解決の方法を考えようとする。	自分が調べたことを、絵や簡単な説明文などにまとめ、発表しようとする。	自分の活動をふりかえり、新しくわかったことや発見したことに喜びを持ち、次の活動に生かそうとする。
四年生	身の回りの環境（人・もの・自然）に興味や関心を持ち、取り組みたいことや調べたいことを見つけようとする。	もっと知りたいことや深めたいことを最後まで調べようとする。	調べたことを、絵や図、表やグラフなどを用いて聞き手にわかるように表現しようとする。	自分の活動をふりかえり、学んだことや学び方を今後にも生かそうとする。
五年生	自分を取り巻く人、もの、自然に対して、興味や関心を持ち、調べてみようとする。	自分が持った興味や関心に対して、自分なりの視点で課題を解決しようとする。	調べたことを自分の思いが聞き手に伝わるような方法で表現しようとする。	自分の活動をふりかえり、生活と結び付けて、よりよく生きようとする気持ちを持つ。
六年生	自分を取り巻く人、もの、自然に対して、興味や関心を持ち、より詳しく調べたり、考えたりしようとする。	課題を明らかにするために、調査方法や実験方法を工夫し、学習を進めることができる。	まとめ方や発表方法を工夫し、調べたことを効果的に伝えようとする。	自他の活動をふりかえり、よりよく生きようとする願いを持つ。

(盛岡市立厨川小学校「研究紀要」平成13年10月 をもとに佐藤聡久が作成)

表6 各学年の評価の観点

	かかわる力	追求する力	表現する力	見つめる力
一年生	進んで身近な人々や自然とかかわり、楽しんで活動しようとする。	自分のやりたいことに夢中になって取り組むことができる。	活動の楽しさや感じたこと考えたことを、言葉、動作、歌など自分らしい方法で表現できる。	自分のよさに気づく。 友達よさに気づく。
二年生	身近な人々と進んで活動できる。 生き物や植物を大切に育てることができる。 地域とかかわり、さまざまな発見をする。	自分のやりたいことにこだわりを持ち、主体的に活動できる。	感じたこと、気づいたこと、考えたことを言葉、絵、動作、劇などで表現できる。	自分のよさに気づく。 友達よさに気づく。
三年生	生き物を大事に育て、観察することができる。 積極的に身近な環境に働きかけることができる。	観察したり、人に聞いたり、本で調べたりして課題を解決できる。	絵や文章でわかりやすく表現することができる。	自分の学習を振り返り、次の活動へ向けて生かすことができる。 友達よさを見つけることができる。
四年生	自分なりの課題を見つけることができる。	解決の仕方を自分で見つけることができる。 ねばり強く取り組むことができる。	目的にあった情報を選択し、分かりやすく表現できる。	学んだことの価値や、自分や友達よさを見つけることができる。
五年生	やってみいたいことや疑問を持つことができる。	自分なりの方法で解決することができる。	自分が知って欲しいことを分かりやすく表現できる。	こういうことだったのかと、生活と結びつけてふりかえることができる。
六年生	自分の課題を持つことができる。	自分なりの方法を持ち、集中して活動できる。	効果的な表現方法を選択し発表できる。	自分の活動や友達活動をふりかえり、学んだことを今後の生活に生かそうとする。

(盛岡市立厨川小学校「研究紀要」平成13年10月 をもとに佐藤聡久が作成)

※表4と対応させている。能力目標と位置づけた。

## 6 厨川小学校における生活科と「総合」の関連

### (1) 「総合」につながる生活科

平成元年の学習指導要領において新設された生活科は今回初めて改訂が行われた。改訂後の基本方針を要約すると以下の通りである。

- ①身近な人や社会，自然と直接関わる活動や体験の重視。
- ②活動や体験の中で生まれる知的な気づきを大切にす指導の重視。
- ③地域の環境や児童の実態に応じた重点的・弾力的な指導の重視。

これらの点に留意しながら厨川小学校では「総合」だけでなく生活科でも四つの力をつけさせたいと考え、i) 学校と生活 ii) 家庭と生活 iii) 地域と生活 iv) 公共物や公共施設の利用 v) 季節の変化と生活 vi) 自然や物を使った遊び vii) 動植物の飼育・栽培 viii) 自分の成長という八つの内容を指導することにより、「自立への基礎を養う」ことを生活科の目標とした。

また、学習方法としては、身近な人・もの・自然と直接かかわる活動や体験を通して自立への基礎を養わせる手だてとした。

そして、自分の興味・関心、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで行うことや、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できることを「学習の自立」、基本的な生活習慣や生活技能を身に付けて、人・もの・自然と適切にかかわることができることを「生活上の自立」、自分のよさや可能性に気づき自信を持つことで、現在及び将来における自分自身の成長への期待と意欲を持つことができることを「精神的な自立」とし、その上で、1年生から2年生までの2年間で「繰り返し体験」と「交流」を重視し実践する年間指導計画を立てた。

ところで、ここでいう「繰り返し体験」と「交流」とは、次のようなことである。

#### ① 「繰り返し体験」

「繰り返し体験」とは、同じ体験を繰り返していくうちに以前との違いを発見したり変化を感じ取ったりすることができる、ということのをねらいとするものである。

例として「白鳥さんこんにちは」を挙げる。1年生では3学期、「地域を流れる北上川に飛来する白鳥にえさをやったり観察したり、身体表現する活動を通して、ふれあいを深め親しみを持って大切に世話をすることができる。」というねらいで白鳥にえさをやったり観察したりする。その中に発見や感動があり、次回への意欲も生まれる。そして、次にまた川辺へ行き、白鳥にえさをやる活動を繰り返して行う。するとまたその中で新たな発見や感動があり、意欲も生まれる。その繰り返しの中で児童の中には以前と違った知的な気づきが生まれてくる。そして2年生の同じ時期に同じく「白鳥さんこんにちは」という単元を設け、繰り返し活動を行う。その際1年生の時の体験をもとに、児童の中に以前とは違った新たな発見や感動、知的な気づき生まれる。そしてそのことが繰り返されていく活動である。

このほか1・2年の「みんなで育てよう」や、1年生の「いきものとなかよし」と2年生の「わくわく生きものランド」も同じく「繰り返し体験」を重視した単元である。

#### ② 「交流」

「交流」とは、児童が自分の思いを表現する場として必要な活動で、対象を変えながら繰り返し行うことによって自分の思いをどのように伝えたらよいか気づくことができる、ということのをねらいとするものである。

例として1年生の「いきものとなかよし」と2年生の「わくわく生きものランド」を挙げる。どち

らも生き物（昆虫や小動物）を教室で飼い、世話をしたり遊んだりする事を通して生き物を大切にすることができるということをねらいとして行う単元である。2年生は、自分たちが世話をしている生き物についてその性質や飼い方を図鑑などでしらべたり実際に経験したりして覚えていくが、それを他者に伝える活動をすることでその知識をより確かなものにする。また伝えたいことの中には知識だけでなく自分の思いや感動も含まれる。それを伝える相手が1年生である。1年生にどんな説明をすれば伝えられるのか、あるいはどんな方法を用いれば1年生が興味を持つのか、自分の思いを伝えられるのかということを考えて活動を行う。そして実際に自分たちで作った「わくわく生きものランド」に1年生を招待して喜んでもらおうという活動を行う。その中で2年生はどんな活動、どんな発表をしたら楽しんでもらえるか、分かってもらえるかを考え、活動を自分で決定していく。1年生は、2年生に招待されることで2年生から教えてもらったり一緒に遊んでもらったりしながら、2年生になったらこんなことをしてみたいという思いや願いをふくらませ、活動に期待を持つのである。

このほか、1年生の「ほくもわたしも厨小の1年生」と2年生の「2年生になったよ」、1年生の「いきものとなかよし」と2年生の「わくわく生きものランド」、1年生の「みんなであそぼう」と2年生の「おみこし わっしょい」も同じく「交流」を重視した単元である。

このように、生活科改訂の方針を生かしつつ、「繰り返し体験」と「交流」を重視した指導が厨川小学校生活科の特徴である。

## (2) 生活科から発展する「総合」

厨川小学校では、生活科で培われた「確かな学び」を基礎として「総合」の学習に発展させることを試みた。中学年からはより充実した児童の主体的な学びを構築するために、「繰り返し体験」や「交流」で重視したように、身の回りの環境（人・もの・自然）と直接かかわる活動や体験を通して

- ①自ら学び自ら考えるという課題追求の過程を重視する学習。
- ②学び方やものの考え方を身につける学習。
- ③自己の生き方について考えるきっかけとなる学習。
- ④各教科で得た知識や技能を総合的に発揮する学習。

という四つの柱を立てた。

「歴史探検『厨川の柵』<sup>19)</sup>」を例として挙げてみよう。この学習では児童が設定した課題と解決のためには何を、どのように調べればいいのかについてを教師が常に把握し、課題が早く解決してしまった児童に対してはさらにどのような学びを展開すればいいのか助言を行った。あくまでも児童が自らの力で学び、考えられるような支援を行い、何で学ぶのか、何を使って学ぶのかを常に考えさせ、教師がそれを把握しながら活動を進めた。内容的には自分たちの校区の歴史を学ぶことを通して当時の人々の生き様や思いにふれることが自己の生き方を考えるきっかけになると考えた。そして社会科の調べ学習、家庭科の被服づくり、図工のペーパーアートづくりなど各教科で得た知識や学び方、表現の技能を活用して学習を進めた。

この例のように、どの単元においても「総合」には上記の四つの観点を盛り込んだ。生活科で獲得された学習方法と学習のための「自立への基礎」すなわち「自ら学ぶ力」の形成で得られた考え方が厨川小学校の「総合」の支えとなり、生活科の学習で身に付けた力を「総合」において一層発展させていくことを指導の基本に据えたのである。

## 7 「総合」の進め方・カリキュラム

厨川小学校では、「総合」を「学年テーマ総合」「行事総合」「学級フリー総合」「卒業研究」の四つに分けて構成した。

「学年テーマ総合」については、四つの観点からカリキュラムを作成した。また、6年生において行う卒業研究が厨川小学校での「総合」の総まとめであり、「総合」やその他の教科などで培ったことをまとめる場であると位置づけた。

### (1) 「学年テーマ総合」

社会的な課題や学校・地域の特色、教科等との関連に基づいて開発した単元から構成した。児童一人一人に課題を持たせ、それを解決させていく過程を重視した内容であり、厨川小学校の「総合」の中心と位置づけた。

例：6年・歴史探検「厨川の柵」 4年・北上川探検隊

### (2) 「行事総合」

6年生の修学旅行や5年生の林間学校、遠足など、学校行事との関連において「人」「もの」「自然」に働きかける学習である。これまで行事として行ってきた活動に課題追求場面を設定することにより、児童の主体的・創造的な学習をより一層重視した内容である。

なお、「行事総合」は「学年テーマ総合」とは異なるものだが、「学級フリー総合」と違い明確に実施時期が示されるので年間計画の中に入れてある。

例：6年・仙台松島探検（修学旅行と関連） 5年・森林探検隊（林間学校と関連）

### (3) 「学級フリー総合」

学級の児童の興味・関心や、担任の思いや願いに基づいて設定される学習である。短時間で構成され、教科等の学習を発展させたり、「学年テーマ総合」ではふれることのできない内容を扱ったりする。

例：4年1組・おやつ何にしようかな 6年2組・目の不自由な人の立場に立って

### (4) 「卒業研究」

厨川小学校の「総合」の最終的なゴール。6年生の夏休み前のオリエンテーションから始まり、2月に研究の成果を発表する会を持つ。これまでの「総合」・教科などの学習で得た力を総動員して取り組む個人研究である。

例：6年・卒業研究に挑戦～課題追求の力をつけよう～

なお厨川小学校では「学年テーマ総合」の学習カリキュラムを以下の視点から作成している。

- ①確かな学びをつくる4つの力が獲得できる内容であるもの。
- ②人・もの・自然との積極的なかかわりができる内容であるもの。
- ③学校や地域の特色、社会的な課題に基づく内容であるもの。
- ④前学年で学習した内容と系統的・発展的に関連し、学年が上がるにしたがって児童の視野・学習の幅を広げることができるもの。

以上四つの観点から作成した「学年テーマ総合」のカリキュラムが以下の表7である。カリキュラムは単元の実施後や年度末に各学年で反省会を行い、次年度も行うカリキュラムであるかどうか、改善すべきか、新たに単元を設けるかどうかについて検討し、次年度の学年へと引き継ぎ、新年度は新たなカリキュラムづくりを行う。

表7 平成12年度「学年テーマ総合」のカリキュラム

	3年	4年	5年	6年
人	身近な人（家・近所） お年寄り・子ども	地域に住む人	市内で働く人	世界の人 自分たちを支える人
設定 単元	おじいちゃん、おば あちゃん、ようこそ	教えて！ いいとも！！	盛岡の名人さん	世界の人々と 友達になろう
関連 教科等	社会科	国語 （人材マップ）	社会科	社会科
もの	公共物や 身の回りのもの	自分たちの暮らしを 支えているもの	商業・産業 伝統工芸など	地域の歴史や文化
設定 単元	きれいな町・厨小	ゴミレンジャーで ゴゴゴ	このまち大好き こちら報道部	歴史探検「厨川の柵」 仙台松島探検
関連 教科等	道徳	社会科	社会科	社会科 行事（修学旅行）
自然	学校のまわりの 動植物	地域を流れる川 （北上川）	森林・山・川など	※6年生は卒業研究 を行うことと時数 確保の関係から自然 に関する単元設 定は行わない。
設定 単元	花いっぱい厨小 厨小ネイチャーラン ド	北上川探検隊	森林探検隊	
関連 教科等	理科	理科 社会科	理科 行事（林間学校）	

（盛岡市立厨川小学校「研究紀要」平成13年10月 をもとに佐藤聡久が作成）

## 8 「総合」の実践と評価

### (1) 「学年テーマ総合」の実践

①厨川小学校で平成13年度に行った「学年テーマ総合」の実践を見てみる。

#### －3年生－（環境、自然、交流）

「花いっぱい厨小」（自然）

- ・学校のまわりを花いっぱいにする活動を通して、植物を大事に育てようとする気持ちをもつ。
- ・花の植え方や土づくり、お世話の方法を知り、生き生きと活動する。

「厨小ネイチャーランド」（自然）

- ・学校のまわりの動植物に興味、関心を持ち、身近にある動植物に進んでかかわって調べる。
- ・動植物とかかわりながら、不思議に思ったり疑問に感じたりしたことを探究する。

「おじいちゃん、おばあちゃん、ようこそ」(人)

- ・昔の遊びを一緒にしたりお話を聞いたりする活動を通して、お年寄りとかかわる。
- ・相手を思いやり、やさしく接する気持ちをもつ。

「きれいな町・厨小」(もの)

- ・学校のまわりの地区のゴミに目を向け、ゴミのないきれいな町にしようと進んでゴミ拾いをしたり、ゴミを減らす努力をしたりする。

#### －4年生－ (環境, 交流, 体験, 地域)

「ゴミレンジャーでゴゴゴ」(もの)

- ・ゴミについて知りたいことや深めたいことについて調べる。
- ・伝えたいことを明らかにしながら、発表する。
- ・ゴミ問題について、学んだことを振り返る。

「北上川探検隊」(自然)

- ・地域を流れる北上川について考えることを通して、自分たちが住んでいる地域に興味、関心を持ち、自分の課題を持つ。
- ・課題の解決方法が分かり、情報を収集する。

「おしえて！いいとも!!」(人)

- ・人材マップをもとに「地域の人」に興味、関心を持ち、その人を知りたいと思う。
- ・もっと知りたい、もっと交流したいという願いを持ち「地域の人」と交流し合う。
- ・人とふれ合う喜びを知り、今後も積極的に人とふれ合おうとする。

#### －5年生－ (社会参加, 情報, 交流)

「このまち大好き」(もの)

- ・自分が住む「まち」について関心を持ち、「いいところ」や「改善したいところ」を見つける。
- ・自分が住む「まち」について、「いいところ」や「改善したいところ」について聞き手が納得するように発表する。
- ・自分の住む「まち」について見つめ直す。

「盛岡の名人さん」(人)

- ・盛岡市内に住むそれぞれの分野の名人に興味、関心を持ち、会って話を聞いてみたいと思う。
- ・名人の生き方や仕事に対する考え方を学び、自分の今後の生活に生かそうとする。

「こちら報道部」(もの)

- ・自分でも番組を作りたいと思う。
- ・自分が伝えたいことを映像を通して表現する。

#### －6年生－ (国際理解, 異文化交流, 地域の歴史)

「世界の人々と友達になろう」(人)

- ・自分の興味、関心のある国について意欲的に調べる。
- ・外国の人に日本のことを知らせる計画を立て、積極的に交流する。

「歴史探検『厨川の柵』」(もの)

- ・「厨川の柵」にまつわる歴史について自らの課題を持ち、意欲的に追求し、効果的に発表する。
- ・厨川の歴史についての学習を通して、自分の住む地域の素晴らしさを知り、親しみをもつ。

## ②具体例

この中で、6年生「歴史探検『厨川の柵』」を例として挙げる。6年生では社会科の歴史学習との関連から、地域の歴史について学ばせたいと考えていた。およそ千年前に児童らが住んでいるこの地で日本の歴史にその名を残すような大きな出来事<sup>20)</sup>があり、その出来事について学ばせることを通して地域の歴史に興味を持たせ、地域を理解させ、地域を愛する気持ちにつなげさせたい、という教師の願いから「歴史探検『厨川の柵』」という単元を設定した。

その際、まず教師自身が厨川の柵とは何か、前九年の役はどのようにして起こったのか、学区にあるゆかりの遺跡や地名はどんなものか、などについて学習会を行った。この時盛岡市中央公民館や地域の自治会長、郷土史研究家の指導を受けた。その方々から新たに詳しい人を紹介していただき、ゲストティーチャーとして児童の指導にあたっていただいた。

## (2) 「行事総合」の実践

①厨川小学校で平成13年度に行った「行事総合」の実践を見てみる。

## －5年生－（環境，自然体験）

「森林探検隊」（自然）

- ・森林と人間のかかわりについて興味、関心を持ち、森林について調べてみたいと思う。
- ・森林と人間の関係について考えを持ち、自分とのかかわり方を考える。

## －6年生－（表現，情報）

「仙台松島探検」（もの）

- ・仙台松島について、自分の関心を課題化し、事前学習に意欲的に取り組む。
- ・修学旅行を通して、事前学習の検証をするとともにさらに学習を深める。

## (3) 「学級フリー総合」の実践

①厨川小学校で平成13年度に行った「学級フリー総合」の実践例を見てみる。

## －4年1組－（健康，食の安全，生命）

「おやつ何にしようかな」

- ・自分たちが食べているおやつについて振り返る。
- ・合成着色料について知り、安全なおやつを選んでいこうとする。
- ・合成着色料について学んだことを、親に手紙で伝えようとする。

## －5年1組－（異文化理解，国際交流）

「ハロー！ハロー！」

- ・異文化を知ることを通して自国の文化を知り、行動する能力を習得する。

## －6年2組－（福祉）

「目の不自由な人の立場に立って」

- ・視覚障害者の立場に立った体験や学習を通して、かかわり方を知ると共に、今後の自分のあり方を考える。

## (4) 「卒業研究」の実践

①厨川小学校で平成13年度に行った「卒業研究」の実践を見てみる。

## －6年生－（学びの総合化，表現力）

「卒業研究」

- ・これまでの学習や生活経験をもとに、自分の興味、関心に応じた課題を持つ。

例：盛岡の方言、石川啄木・宮沢賢治の生き方と作品、おじいちゃんとおばあちゃんの人生

- ・担当の先生や友達の助言を参考にしながら、自己の課題を追求し、効果的な表現方法を選択して発表する。

例：廃油を利用した手作り石けんの作り方やその動機などを模造紙にまとめ、実際に作った石けんを添えて発表した。

#### (5) 評価

平成12年12月4日、教育課程審議会より指導要録の参考様式が示された<sup>2)</sup>。それによると、「総合」は「学習活動・観点・評価」の三つについて以下のような事項に留意しながら、各学校で具体的に定めた目標・内容に基づいて評価することを求めている。

総合的な学習の時間については、この時間に行った学習活動及び指導の目標や内容に基づいて定めた評価の観点を記載した上で、それらの観点のうち、児童の学習状況に顕著な事項がある場合などにその特徴を記入するなど、児童にどのような力が身に付いたかを文章で記述する。

具体的には、「学習活動」の事項には単元名を、「観点」の事項には四つの力の中から顕著な事項を、「評価」の事項には「児童にどのような力が身に付いたか」を記述することになる。

このような評価をするためには、一人一人の児童の学習状況や学習の結果に関する情報や資料が長期にわたって集積された評価の資料が必要になる。そこで厨川小学校では、生活科においても行われていたポートフォリオ評価を参考に、「総合」の評価を行った。

この評価は、教師にとって、児童の取り組んできた活動の様子を時間をさかのぼって見ることができるとはならず、

- ①メモや収集した資料などから、活動の様子、進行状況、つまづきなどを把握し、学習の支援に生かすことができる。
- ②児童の感想などから児童の心情面（達成感・成就感・不安感など）を推し量り、支援に生かすことができる。
- ③単元を通じた児童の変容をつかむことができる。

という利点がある。

また児童にとっては

- ①自分の学習を結果より過程で認識することができる。
- ②自分の良さや友達の良さに気づくことができる。
- ③今後の自分のよりよい学習のあり方を考える資料になる。

という、自己評価の材料を与えることができる。

具体的には、累積的な評価をするために学習ファイルを用意し、それには個人またはグループの課題や学習計画、調査で得た情報、取材メモ、写真やパンフレット、自分だけの情報、発表内容と方法、感想、教師からのコメントなどを時系列で集積させた。そのとき、自己評価と教師の評価の欄を設け、自己評価の視点として工夫や努力点、発見や気づき、驚きや喜び、友達との協力や友達の良さ、前までの自分と今の自分の比較、これからの学習についてを書かせた。教師は、児童の良さを見出し、認め、肯定的なコメントや励まし、具体的なアドバイス、学習の価値付けなどを書いた。

このようにして行った評価は児童の良さを見とる、児童の活動を支援するという立場からの評価であり、評価しなくてはいけないから評価するという、いわゆる評価のための評価にならないように十分留意したものである。とはいえ、児童のためにこの評価をどう生かしていくのかという点について

は今後の課題である。

### おわりに

これまでの厨川小学校の実践からは、児童が学ぶ単元を開発できたこと（教材開発）、そして児童につけたい四つの力を示しながら実践を重ねてきたこと（指導の工夫）、そして「総合」のための評価のあり方の構築が成果として見て取れよう。これは、これまでの課題に対する一つの提案であり、今後の実践の参考になると思われる。

一方、今後の課題は次の通りである。一つ目は新たな単元開発の意義を確かめることである。今まで開発した単元だけでなく、社会や地域・父母の実態により、新しい単元を開発することが求められるのではないかということである。具体的に言うと、厨川小学校が開発した単元以外にも地域からの教育への要求として、「総合」に対してどう対応していくかということである。また、開発してきた必要と思われる単元は継続して行えるように、マンネリに陥らないよう、さらなる検討が必要である。

もう一つは、評価方法の妥当性の検討である。指導要録上の取扱い、保護者や児童への説明、児童のために評価をどのように生かしていくかという教師自身の研修等の点についても検討が必要であると考えられる。

（本稿は、東北教育学会第60回大会－会場：東北大学教育学研究科 2003年3月－における研究報告の一部であり、佐藤幸也と佐藤聡久の討論を経て作成した。実践についての整理は佐藤聡久が主に行ったが、本稿全体の責任は佐藤幸也にある。）

### 主たる参考文献

1. 文部省『小学校学習指導要領』，大蔵省印刷局，平成10年12月。
2. 文部省『特色ある教育活動の展開のための実践事例集－「総合的な学習の時間」の学習活動の展開－（小学校編）』，教育出版，平成11年。
3. 岩手県教育委員会『「総合的な学習の時間」Q & A』，平成11年10月。
4. 岩手県教育委員会『「総合的な学習の時間」実践事例集〈小学校〉』，平成12年12月。
5. 盛岡市立厨川小学校『研究紀要 確かな学びをつくる』，平成13年。
6. 盛岡市立山王小学校『研究紀要 自らを深く耕す子ども』，平成12年。
7. 盛岡市立上田小学校『研究紀要 感性をみがき，自分の課題を主体的に解決しようとする子どもの育成』，平成12年。
8. 盛岡市立高松小学校『第3回 岩手県総合的な学習教育研究大会資料』，平成13年。
9. 盛岡市立緑が丘小学校『第3回 岩手県総合的な学習教育研究大会資料』，平成13年。
10. 佐藤幸也編著『地域からの教育改革』，新制作社，(社)農山漁村文化協会，2000年。
11. 村川雅弘・小林毅夫編著『改訂小学校学習指導要領の展開総合的な学習編』，明治図書，1999年。

## 注

- 1) 中野重人「21世紀の教育課題」佐藤幸也編著『地域からの教育改革』, 新制作社, (社)農山漁村文化協会, 2000年, 20頁。
- 2) 同前, 19頁。
- 3) 村川雅弘・小林毅夫編著『改訂小学校学習指導要領の展開総合的学習編』, 明治図書, 1999年, 10頁。
- 4) 文部省告示『小学校学習指導要領』, 大蔵省印刷局, 平成10年12月。
- 5) 佐藤聡久の所属校である。創立130周年になる盛岡市内中心校の一つ。
- 6) 文部大臣が指定する, 学習指導要領等現行の教育課程の基準によらない教育課程の編成等の実施を行い, 新しい教育課程, 指導方法等について開発・研究を進める学校。
- 7) 開発研究学校である。
- 8) その詳しい実践内容等は, 文部省『特色ある教育活動の展開のための実践事例集－「総合的な学習の時間」の学習活動の展開－(小学校編)』, 教育出版, 平成11年, を参照されたい。
- 9) 岩手県教育委員会『「総合的な学習の時間」Q&A』, 平成11年10月, 全48頁。
- 10) 岩手県教育委員会『「総合的な学習の時間」実践事例集〈小学校〉』, 平成12年12月。  
同書は11の調査研究協力校の実践紹介の他に, 前年発行の『「総合的な学習の時間」Q&A』を再収録し, 全111頁で構成されている。
- 11) 保護者や地域のゲストティーチャーなどをさす。山王小学校では「地域の先生」という表現を用いている。
- 12) 佐藤聡久はこのとき厨川小学校に在任しており, 上越教育大学附属小学校と盛岡市立上田小学校の授業研究会に参加した。
- 13) 梶田叡一監修『総合的な学習の時間創造のための基礎・基本』, 総合初等教育研究所, 文溪堂, 2001年。  
有園格・小島宏編著『総合的な学習の理論と実際』, ぎょうせい, 2000年。  
児島邦宏・羽豆成二編『「総合的な学習の時間」研究の手引』, 明治図書, 1997年。  
児島邦宏・山極隆・桐谷澄男編『小学校 総合的な学習ガイドブック』, 教育出版, 1998年, など。
- 14) 人材マップを十分に活用した単元は, 4年生の「おしえて!いいとも!!」である。(表7参照)
- 15) 本校では「追究」ではなく「追求」という表現をしている。これは, 小学生の段階において物事を究めることは現実的ではなく, 児童の学習はものごとを究めるといふより, 常に自分の興味・関心や疑問を追い求める形であるべきだ, と考えたからである。
- 16) 平成13年度を中心に述べるので, それ以前のことは省略する。
- 17) 厨川小学校には養護学級があるが, 本論文では養護学級については今後の研究課題とする。
- 18) 社会科においては片上宗二『社会科授業の改革と展望－「中間項の理論」を提唱する－』, 明治図書, 1985年, 108～140頁においてオープンエンドの授業論について詳しく解説している。
- 19) 「厨川の柵」とは安倍氏が築いた城柵のひとつで, 本校の学区内にあったとされているが正確な位置は未だに特定されていない。
- 20) 「前九年の役」(1051～1062年)。
- 21) 平成12年12月4日, 教育課程審議会「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価のあり方について」の中で示された。